キ　ー　ツ　研　究

—美と真実を追って—

高　橋　千　夏

目　　次

まえがき
Ⅰ　前期ソネットから
1)　友情
2)　弟達に
3)　ホーマーをはじめて覗き見て
4)　きりぎりすとこおろぎの歌
Ⅱ　眠り と 詩
Ⅲ　美とよろこび
Ⅳ　想像力と空想力
Ⅴ　勤勉な怠惰
Ⅵ　オード抜萃
1)　夜鶯のオード
2)　ギリシア古甕のオード
3)　秋に寄せるオード
Ⅶ　後期のソネットと書簡から
あとがき
註

ま　え　が　き

「詩は奇抜さによってではなくて，溢れる美しさで驚かすべきもので，詩の美しさが人に与える感動は決して中途半端でなく，満ち足りるものでなければならない。言い換えると，その美しさは高まり，進展してゆき，映像は太陽のようにごく自然に輝やきいでて，人をすっかり照すのだ。そうして壮麗ではあるが静かな光で包み，黄昏の豊かな喜びに浸らせて，沈んで行くのである。」[1] これはキーツが1818年2月27日付・ジョン・テイラーに宛てた書簡の中の言葉で，詩について彼の信条を述べたものである。「エンディミオン」の第三巻から第四巻にかかろうとしていた頃，自分の詩作に対する不満や反省があって，理想的な姿を描いたものでもあろう。1795年から1821年まで僅かに25才4カ月という短かい生涯ではあったが，キーツが英文学史上に残した足跡は，これに似た光彩を放つものに譬えることが出来よう。尚，当時シェークスピアを読み，彼の広大無辺な受容力とその知性や強烈さに引かれていったことは後で触れるが，一方では，人生に対する歩み方，ひいては自分の詩を高め，深めていく方法を次の書簡等で表わしているのを合せ考えると，詩人が歩んだ目には見えない苦闘の道を，少しでも覗き見ることができる気がする。次に挙げるのは同年5月3日付，J. H. レイノルヅ宛の書簡で，人生を部屋の多い大きな建物になぞらえている。彼はそのうち二つの部屋については描写できるが，他はまだ自分には閉ざされているという。第一の段階は物を考えない間の無思想の部屋であり，第二は処女思想の部屋であって，人は光と喜びに陶酔し，何時までもそこに滞りたいとねがうのだと説明する。だが，其処では人間の性質や心を見る眼が鋭ぎ澄まされてきて，すばらしい効力が生れるのだといっている。いかに人生には不幸や失意，苦痛や疾病などが満ち

ているかが分ってくるようになるのであって，処女思想の部屋は次第に暗くなってくる。四方の戸は開いているが次の部屋へ行く通路は暗く，霧に閉ざされたままで善悪の均衡もとれず，「神秘の重荷」[2] を感じるということを書き送っている。キーツはこの状態で停滞しているが「テインタン寺院」を書いたワーズワースはこの暗い路を探り，多くのものを発見し光を注ぐから，我々よりは優れていると敬意を表している。キーツはまだ成熟した知性を持っていないので，ワーズワースのように大自然の中から，荘厳な喜びや，優しい調べと調和を聴く[3] までには至っていないと告白しているのである。「悠々迫らず知性が怠情の状態をたのしみながら，一視同仁にものを見る力がそなわった時，世の中のあらゆる不愉快なことも，はじめて余裕をもって凝視できる，勇気ある人間になるのだ。」[4] という意味のことを1817年10月にベンジャミン・ベイリーへの手紙で述べているのを考慮すると，キーツは絶えず官能的直感の上に統合力のある想像力や知性を働かせようとしていたことがわかる。更に1818年3月24日にジェイムズ・ライス宛の手紙には「天地創造の時，水が多量に造られたように――或一定量の『知性』が薄い空気の中に吐き出されて，人間の頭脳がそれを糧とするようになったらしい。」とかいた。この知性こそ，美しいものに対してキーツがいだく情熱と一体となるものであることを，後[5] で述べている。

ジョン・ミドルトン・マリーは彼の著，「キーツとシェクスピア」でキーツもシェクスピアと同じ型の詩人とみているが，文学背景もない一青年がどうして天才的文学作品をただの四年余りで成し遂げたかわからないけれど，シェクスピアもほんの田舎から出て来ただけで，創作年月は30年あったが，世界に卓越した作品を残したあの奇跡と同じではないかと言っている。並の人間が60年70年と生き長らえても，キーツのように，「たしかに，この世には真実なものがある」[6] と確信し，美と真を追求して止まず，強烈な集中力であれ程の詩を生み出すことは，到底できるものではない。若い人びとのみならず，彼の死後150年にわたって，キーツの詩が人びとの魂を魅了してきたものは何であろうか。その霊感の源は何か。詩の心は古今東西に普遍的に生きるものでなければならない。現代の混沌とした文化や，産業経済中心の時代，目まぐるしい社会情勢の中にあっては，純粋な感覚や想像力は萎え衰えがちと思われるが，この様な時にこそ我々は真実の世界へ，想像力によって解放されることが必要ではなかろうか。人間の生命を躍動させる力を持つものが想像力や知性であるならば，未来に向って，矛盾や醜悪を乗越えて，より高度な処で我々の意識や知性を統合してくれるものがあるのではなかろうか。

然し，これから始めようとする私の小さな試みは，特殊な研究ではなく，キーツの最初の詩集 "POEMS by JOHN KEATS" に含まれているソネットからはじめ，想像力を養ないながらできる丈の理解と鑑賞を綴って，美と真を追ってみたいと思うものである。

I 前期ソネットから

1) 友情（ソネット，Ⅶ，Ⅸ，Ⅻ）

1817年にロンドンのオリヤー社から出された処女詩集は，「私は小山の上に爪先き立つ」で

始る詩や書簡詩，17のソネットに加えて「眠りと詩」の四部を含む。これらの十四行詩は青年キーツをあらわす素直な感動を盛ったものが多い。詩人として立つことはまだ判然としない1815年頃，彼はロンドン市ガイズ・ホスピタルの医学生であった。貧民街のような地区で学ぶ彼は家庭的にも精神的にも，孤独そのものであった。ソネットⅦ，「おお孤独よ」にはどんなに友との交わりを求めていたかが書かれている。人間最高の幸福とは，「言葉が優れた想念の姿となって，純粋な心の主と楽しい交わりをするのが，私の魂の喜びなのだ」と歌っている。この詩はエグザミナー紙1816年5月に，詩集となる以前に Leigh Hunt が掲載したもので出版物に発表された最初のものである。キーツが通っていたジョン・クラーク学校の校長の息子で年長のチャールズ・クラークはキーツと親しくし，多くの書物を貸したり又共に詩を読み，しばしば文芸を論じることがあった。キーツが詩の喜びとその霊感を得るようになったのも，この優しくて熱意のあるクラークのお蔭であったことが記されている。キーツの喜びは，心から話し合える人と「孤独」のところへ逃れていくことだと言っている。

ソネットⅨは「刺すような気まぐれ風がここかしこさわぐ」ではじまる。その年の11月頃の冷たい夜更け，ハムステッドの「健康の谷」にあったハントの家から友人達と別れて，独り夜道を歩きながらあふれるばかりの友情を歌っている。ミルトンやペトラルカの詩を友達と夢中になって読んできたのであろう。其処は当時かなり有名な芸術家や文人又政治家が出入する場所であった。

For I am brimfull of the friendliness
That in a little cottage I have found ;
(小屋で知り合った友情が胸一ぱいにあふれているから)

きびしい寒さも遠い夜道もなにも気にならないというのである。

ソネットⅫ「早朝に親しい人びとと別れるときに」はキーツが夜もすがら友人と語り合い，よろこびと勇気を得て，はげしく詩心が高まって来たさまを美しく歌っている。最後の行はこんなに早く独りぼっちになるのは堪えがたいと言っている。人生を譬えた第三の部屋には愛の葡萄酒と友情のパン (Bread of Friendship) が貯えられていると書いているのをみても，早く両親に死別した彼にとって，又詩人としての巣立ちの場としても，友情こそは養ないの親であったのだろう。

2) 「弟たちに」（ソネットⅧ）

末弟 Tom の誕生日1816年11月18日の夕べ，新しく移ってきたチープサイドの下宿で，「弟たちに」と題してソネットⅧをかいている。煖炉の火が明るく燃え，兄弟達の魂を包む家庭的なあたたかさと神秘的な静けさとが描かれている。弟のジョージとトムは兄の詩行が湧き出るのを書きとめようと，詩的な気分にひたって待っている。トムの誕生日がこんなに穏やかに静かに暮れていくのを，兄は喜こんで次のようにソネットを結ぶ。

Many such eves of gently whisp'ring noise
May we together pass, and calmly try

What are this world's true joys,—ere the great voice,
From its fair face, shall bid our spirits fly.

（こんな優しい囁きの夕べを幾度も共に過せますように
この世の真の喜びを静かに味うために。美しい御顔からみ声がひびきわたり
われらの魂をとわに飛び立たせ給う日まで。）

三人の兄弟がより添うているこの平和な夜は，多分この世での最高の時間であったかもしれない。神ならぬ身の二年後のトムの運命は予感できないものであったであろうから。

トムへキーツは1818年6月の旅先から，長ながと湖畔地方の美しい自然描写や，スコットランド地方などの情景，人情，生活などをかいて旅日記のような手紙を送っている。その他の手紙にみられる心づかい又，トムの病が篤くなった数カ月献身的な看護をしたことなどを合せて，兄弟愛が察せられる。然しこの年の12月トムの魂は永遠にこの世をとび去ってしまった。幼なくして父に，又母に別れ，次男のジョージもこの年の6月結婚して就職難から米国へ移住してしまい，唯一人の妹とも離れて暮さねばならなかった。キーツは世の辛らさも離別の悲しみも，幾度か骨身に徹して味わってきている。そうした背景を知ってこのソネットを読むと，誕生日の夕べのおだやかな静けさと兄弟愛が胸に泌みてくる。ロバート・ギッティングズは彼の著「ジョン・キーツ」96頁にこの詩を取りあげて，キーツの書いた詩の中で最もワーズワース的なものであるといっている。又ワーズワースの持っていたキリスト教的伝統というものをキーツが表面に出した詩という意味でも興味があると加えている。テニソンの辞世の詩の終りと似通った神の姿が想像されるほどである。

3)　「はじめてチャップマンのホーマをのぞき見て」（ソネットXI）

キーツはこれまでに知っていたホーマーの世界とは大変違った，力強く，又想像力に富んだ古典ギリシア文学をかい間みて，大きな眼を開き驚異の喜びを感じた。ポープ訳のホーマーは典雅な作詩法に則とったものではあったが，エリザベス朝の劇作家であるチャップマンの英訳には因襲的なものが少なく，浪漫的な力強さと明るさがあったのであろう。古典ギリシアへの開眼はキーツが求めていたものへ近づく喜びであった。人間の魂が新しい世界の発見によってその激しい感動を現わすことができれば，それは文学に限らず芸術の目指すものの一つではなかろうか。キーツは当時下宿をしていた辺を「ひどい所」と言っていたが，彼は「黄金の実る国」(the realms of gold) を遍歴していたのであった。1816年10月の或夜，クラークを訪ねたところ，彼は偶然に借りてあったチャップマンのホーマーを読んで聞かせたのであった。イリアッドやオデッセイの物語に魅了された二人は興奮と感動にみちて，夜の明けるまで時のたつのを知らなかった。2哩離れていた自宅へ歩いて帰るのであるが，しかも翌朝の10時にはこのソネットが書き上げられて，クラークの許に早朝便で届いたと聞いては驚くの他はない[7]。詩魂が天才的詩人を通してペンを走らせるのはこのように自然なものかと思う。史的事実から言えば Cortez は Balboa[8] の方が正しいのだと批評家達から指摘されているが，20才の青年詩人としては大胆であり堂々として整ったソネットである。高鳴る激情をおさえて力強いポー

ズを構成し，舞台や絵画以上にドラマティックな場面を展開する。リズムも明快で総数64のソネットの中で最も知られたものであろう。

Then felt I like some watcher of the skies
  When a new planet swims into his ken;
Or like stout Cortez when with eagle eyes
  He star'd at the Pacific—and all his men
Look'd at each other with a wild surmise—
  Silent, upon a peak in Darien.

（その時私は天体観測者のような興奮を感じた，
突然視界に新星がすべり込んだ瞬間のように。
又は勇敢なコルテーズが荒鷲のまなこで，太平洋を睨みすえて
——部下どもはみなたける憶測で互に眼と眼を見交わし——
無言のまま，ダーリエンの頂で仁王立ったように。）

watcher, swims, eagle eye, star'd, Look'd at, a wild surmise はみな一言も発し得ない状態で機敏な活動をする眼の働きと，激しい心の動きをあらわす言葉である。結びの 'Silent' はソネット全体の静止を，ダーリエンという秘境にある峰の上で，ダイナミックな力で集中的に行ったところに効果が上っている。R. H. フオグルは彼の著「キーツとシェリーのイメジャリー」の中で感情移入のイメジャリーを論じているが[9]，たしかにキーツは静態の象形があらわす内在する力を持っている。これも静の中にある強烈な動態の可能性を如実に表現する例である。

4）「きりぎりすとこおろぎの歌」（ソネットXV）

1816年12月ハンプステッドのハントの家で折からこおろぎの声をきき，即興的に書いたものと言われている。明るくさらりと書き上げたソネットながら，音感の上からも，情景や内容についても恐らく，誰でも頷づける詩であろう。第一行目の「大地の詩は決して絶えない」と歌い出す声は sestet のはじめの行で全く同じ意味をくりかえす。虫の声は終始行間にひびいている。空の鳥どもが夏の暑さで樹影に鳴りをひそめても，きりぎりすだけは，刈り立ての牧場からきれいな声をころがしてくる。

That is the Grasshopper's—he takes the lead
  In summer luxury, —he has never done
  With his delights ; for when tired out with fun
He rests at ease beneath some pleasant weed.

（あれはきりぎりすの歌—彼は音頭をとって夏の楽しみを歌う
—彼はけっしていろんな喜び事を止めない。
遊び疲れたら気持のいい草原の下蔭でゆっくり憩うから。）

きりぎりすとこおろぎは夏から冬への間，いつとはなしに命を受け継いで，大地の歌人は連綿と絶えることが無いという響きを次に聞こう。

On a lone winter evening, when the frost
  Has wrought a silence, from the stove there shrills
The Cricket's song, in warmth increasing ever,
  And seems to one in drowsiness half lost,
    The Grasshopper's among some grassy hills.

（さびしい冬の夜に，霜がおりて
  しんしんしてくる時，煖炉の辺から
こおろぎが急に歌い出す，とろとろと暖まり
  うつらうつらとまどろむ者には
    草茂る丘になくきりぎりすかと夢うつつ。）

通俗の時間を越えたところに生きている小さな生命と，太古からの大地との繋がりが神秘に思えてくる。人は大自然の中に幾世紀も生きてきて，いつもこおろぎの声を聞き自分たちの命もこおろぎと共にあることを知って楽しむ。試みに万葉集上巻第十巻秋雑詠[10]の中にこおろぎの歌が三首ある。その中の一首，

影草の生ひたる屋外（やど）の暮陰（くれかげ）に
  鳴く蟋蟀は聞けど飽かぬも

をみると人の方からこおろぎはいつまで聞いても飽きないものだというのであるが，キーツはこおろぎを主体として何時までも歌い楽しんでいるといっている。同じく第十巻の中からもう一首をあげてみよう。

こほろぎの待ち歓べる秋の夜を
  寝るしるしなし枕と吾は

こおろぎが，待っていたとばかりに喜こんで秋の夜長を歌いつづける情景は季節の生命力があふれている。それに聴き入る人はどうもねてしまうのが惜しいのである。キーツの方は，まどろむ人が虫の声に夢か現の境で夏の幻想へと還っていくのである。

野口米次郎が一青年の詩集の序文に記した文が，キーツのこのソネットを頭において書いたのではないかと思われるものを見出した[11]。「一匹の蟋蟀が草の下で鳴いているのを聞いたことがある……その声は小さかったが，群青色の大空をわがものとして，広漠幾里にわたる高原をわがものとして……。私は其時真実の詩人は正にかくの如きものであろうと感じ，詩人の歩むべき道を発見したように思った。私自身は一匹の蟋蟀だ。」野口は自分でも英詩をかく詩人であったから，潜在的にキーツの詩のイメージがあって，詩人の使命というような言葉になったのではなかろうか。

キーツは1818年12月に「空想」（Fancy）と題して感受性の強い美しい詩を作っているが，高い使命をもっている空想は，霜が降っても，大地が失ってしまった綺麗なものや，夏の季節の嬉しいものをみんな持ってくるということを歌っている。心の扉を開けて空想をほしいままにすると，四季の喜びは際限なく訪れてくるという着想はずっともっていたものと考える。

II 眠りと詩

キーツが初期にかいた長い詩「眠りと詩」には彼の特徴と思われる要素が所々に見られる。人生の短かさや，果無さを嘆じている一方で，詩人の使命をどうしても求めて止まない。憧れや衝動が若わかしく時に生なましいが，もっと人生を静かに考えてみなければならない心構え等も随所にあらわれてくる。

Stop and consider! life is but a day;
A fragile dewdrop on its perilous way
From the tree's summit;—— (85～87行)

（立ち止り熟慮せよ！　人生は唯の一日にすぎぬ，
はかない露が木のてっぺんから
今にも転り落ちそうな危険さだ。）

人生が短く儚かないものであればある程，その真実な点を突いて美意識として訴えるところに，万人の共通感情が転じて強烈な詩となる。例えば H. W. ロングフェロウの「人生の讃歌」では，ダビデの詩「人生は果無い夢に過ぎぬ」[12] をとり入れて歌っているが，ここでは人生をそんな空虚なものと思ってはいけないと強調するために引いたのであって，却って説教がましい気さえする。眠りへの讃美は題の下に小さくチョーサーの詩を記してあるのでもわかるように，眠りの世界は世の重荷も煩いもなく心安らかな時なのである。歌い出しは，夏のそよ風，咲いたばかりの花に集い唸る蜜蜂，緑深い夜鶯の住む谷間，床かしいロマンスなどが一気に挙げられて，尚それらよりも優じくて，慰められ，癒やされてもっと幻に満ちたものは「眠り」ではないかと問いかけで誘導してくる。1819年の「夜鶯のオード」は英詩の中でも代表作といわれているが，夜鶯やじゃこうばら，眠りを誘う芥子の香りも，早くからキーツの詩の素材としては欠くことのできないものであった。麻酔とは名の通り，医学を学んだキーツでなくても，「芥子」の効用は誰でも連想できる。眠りの状態は苦痛とか悲しみを柔らげる。キーツはこの甘美をさそう眠りに「思考」をとりいれる。25行目の thought は world ともなり，knowledge でもあり，intellect と総合的に呼ばれるものともなる。眠りは我を忘れた状態となって美しい他のものへ移行できる時間である。彼は官能的なものに止らず一層高次なものへと高められた詩を書こうとして絶えず苦しんでいる。詩神に向って祈るばかりの切な呼びかけをし，47行は "O Poesy!" ではじまる。あなたの為にペンをとっている詩人キーツなのだがまだまだ広大無辺の詩の国の住人となることはできないと繰り返し二度もいっている。花の香りに息もつまるばかりとなり豊麗な死を待ち，今捧げられたばかりの生け贄のように，偉大な詩神アポロのところへ空翔けていくのかと若い魂は迷うのである。だが，次の61行からは極くノーマルなことを考える，「もし私が圧倒されてしまいそうな快楽に耐えてゆくならば，あらゆる場所の美しい幻をもたらしてくれるであろう，木蔭の奥は楽土となるだろうし，そこで永遠の書を開くことにもなろう」と。キーツの空想力は自由になり森や泉に遊ぶニンフ，眠る乙

女などの華麗な想いにいたる。次には又もや，「我々はどうして，どこから来たものなのかと考え耽る誠に不思議な数々の霊魂の詩」（69～71行）という方向に転じていく，これは確かにギッティングズの言う通りに，ワーズワースの影響を受けている発想と思われる。世の儚かなさを歌う詩行はつづく。

Life is the rose's hope while yet unblown;
The reading of an ever-changing tale;
The light uplifting of a maiden's veil; (90～92行)

（人生はまだ散らない前のばらの望，
たえず移り変るものがたり，
処女のベールをかかげる光。）

喜悦と悲哀の両面，光と影の相反する二面を絶えず詩の中に組み合せていくのがこの詩においても明瞭にわかる。これはキーツの特徴の一つで，根本的な観念として全生涯を貫いて展開されてゆく。

O for ten years, that I may overwhelm
Myself in poesy; (96～97行)

（ああ，もう10年ほしい，私が詩歌に全身打込むことができるために）

霊感を受け何んとかして詩人として一角になりたい希望に燃える若者として，十年という年月を願うのは当然であろう。この詩は「プーザンのフローラの国」という画を思い起して一気に書かれたものと言われているが，Flora の国，Pan[13] の世界を空想のままにさまよう。そのきらめくばかりの官能美に訣別できるだろうかとあやぶむが次の123行には俄然決意を示す。

Yes, I must pass them for a nobler life,
Where I may find the agonies, the strife
Of human hearts:

（そうだ，私はもっと高度の世界へ行かねばならぬ，
其処には人間の心の苦悩や争いがあるのだ。）

と人間苦を反省する。当時改革思想の持主であったハントの影響で，受け売りのようにポウプやオーガスタン時代の詩人を攻撃する行が出てくる。186～187行にかけて，詩の泉を湧き立たせた天馬ペガサスならで連中はがたつく馬[14]に乗って揺れていると書いたのは若者らしくはやる気持が現われている。それからキーツが敬愛していた天才少年詩人 Thomas Chatterton (1752—70) に対して哀惜を掲げたり，折しもチャイルド・ハロルドを出した Byron をばレマン湖にうかぶ白鳥に擬して讃辞を送ったりしている。

次には湖畔詩人 Wordsworth や Coleridge に及び 1798年に出た "Lyrical Ballads" に触れている個所がある。「実のところ詩の潜在的な力から轟く不思議な雷鳴がある。真に荘厳な所からくる優さしいものと強いものとの混合のうただ。」と230～33行に歌っている。詩への憧れの姿は翼の煌めく金の戦車を馳るアポロであり，天馬や天使であって，地上のありふれた

ものと違い天を高く翔るものであった。「眠りと詩」には青年キーツがどのように英国浪漫時代を生きていたか，一寸した文学史の流れを見る思いがする。

A drainless shower\Of light is poesy: 'tis the supreme of power. (235～36行)（つきぬ光の驟雨こそ詩であり，それは力の極致），や246～45行の「詩は悩む友の心を慰め，人の思いを高揚するもの」などの行は，前者は美しさにおいて，後者は詩の使命を示すものとして特筆に価する。

然しキーツは自分は若く経験も浅く，詩人として大成するにはどんなに人生の暗黒面や神秘も知らねばならぬかと思うと，時には不可能ではないかとさえ悩む。そして兄弟や温かい友人の援助を心から願う。詩が終りに近づくにつれて又もとの「眠り」に帰っていく。芥子の冠を頂いたあの眠りを忘れてはいけないので，其処に静かで甘美な詩人の住家があって，その楽しみの神殿の鍵は詩人が持っているのだという。（354～355行）キーツの詩には到る処にギリシア神話か，泰西名画や彫刻から暗示を得たと思われるような絵画美に富んだ表現がつづく，踊る妖精の群，笛に耳傾ける少女，沐浴した直後のダイアナ，サッフォーやアルフレッド大王，又はローラの姿に見入るペトラルカなど様ざまな憧れの人物が現われる。その仕合せな姿から自由に羽ばたいてくるものがあり，そこに Poesy の顔が輝やくというのだがこの辺は何か鮮明さを欠いていて曖昧である。この長詩全体を通してみれば雑多なところや未熟な面もあると思える。とにかく詩神は天の御座から詩人がまだ語り得ないことを見下しているので，キーツは眠りから目覚めて，思いを湧き起し，朝日と共に勇んで詩を書き始めようと決意する。父が子に何か遺産でも残すように大変な使命感を示すもので，何かを詩人とし残したいという意味であろう。確かにキーツは後世にテニスンやラファエル前派の人々に影響を与え，又キーツに私淑していたロバート・ブリッジズは彼の最後の長篇を名づけて「美の遺産」とした。悲壮な戦争詩をかいた W. Owen (1893—1918) は戦死する最後までキーツの愛読者であった。しかしこの頃のキーツは一介の青年詩人にすぎなかった。

III 美とよろこび

1817年4月下旬から大作「エンディミオン」を書き出していた。この第一行は凡そ浪漫派の詩を知る者は，一度は口にする金言である。

A THING of beauty is a joy for ever :
Its loveliness increases; it will never
Pass into nothingness ;

（美なるものは永遠のよろこび，
その麗わしさはいや益して，決して
無に帰することはない。）

この精神はキーツの全身全霊を賭けて生涯詩作をつづけたモットーでもある。この詩はギリシ

ア神話を素材として理想美を追っていく物語詩で，情熱は限りなく美しくもえて魂の火となる。その喜びが満ちあふれて詩となるのである。空想の翼にのせられて，ゆっくりと空から見るようなパノラマ的な秘境の美しさと，詩人の描く空想の豊麗さにはしばしば目がくらむばかりである。浪漫復興の最高潮の時代に，若い天才詩人が湧き出るままに日に50行づつという相当なスピードで書き進められた大作であり，四巻四千行を計画通りに書き上げた意志力は恐しいほどである。1817年12月脱稿，翌年出版されたが当時反感を持つた人達の酷評や，又官能的な詩であり価値がないと非難も受けて，キーツには大打撃であった。しかし，この長詩は尽きない美の宝庫である。斎藤勇注釈「エンディミオン」(研究社)の前がきで氏は「思想が特に注意を喚び起す所以のものは，彼の性格に深く喰い入っていた他の半面，即ち感覚美追求熱とこの人道主義的態度との調節——或はむしろ葛藤——にある」と述べ，もしこの対立がなかったら魅力がなくなると書いている。又斎藤氏は第一巻797行以下を挙げ，キーツの理想美を体得しょうとする道を明らかにされた。又キーツは「もっと充実した心を捉えるもの，もっと自己を空しくしてしまい，魂を奪われるもの，全く強烈な最高のものこそ愛と友情によってつくられ，ヒューマニティーの前面に高く座すもの」というのである。まだ見ぬベールに包まれた光の園の最も奥にある愛はこの詩人には神秘でしかない。1817年11月22日付ベンジャミン・ベイリー宛の手紙は重要な内容を数々含んでいる。「私は人の心の持つ愛情の神聖さと，想像力のもつ真実の外は何も信じない。想像力が美とするものは，以前に存在したものでもしなかったものでも，美としなければならない。」[15]と述べて注目を浴びている。キーツは愛の場合とおなじくすべての熱情は，没我的な凝視の深みの中から，本質的な美となって創造されるものだと信念を述べている。そして "O for a Life of Sensations rather than of Thoughts!" 「ああ思索よりも感覚の世界がのぞましい」と直後に言っている。このセンセーションという語については Rollins 編集のキーツ書簡集第一巻185頁に脚註で W. W. ベイヤーが「五官を通じての直感」という意味で使われているとしている。岡本昌夫著「コールリッジの想像力説」[16]の中で氏はコールリッジの「文学的伝記」からの説明に於て「詩人は人間の魂全体を活動させる」と述べ，更に「想像力は感覚によって得た資料を統一し，組織し，構成する第一の力であって，理性や悟性のように第二次的なものではないというのである。想像力は，理性や悟性よりも，人間知覚において，より根源的，先駆的であり，従って，理性および悟性を内包するとも考えている。」とし，想像力と感覚，理性などのかかわりを明瞭に示されているので，次にキーツが，「想像力は若者の姿をした幻であり，やがて来る現実の前ぶれなのだ」と手紙に綴っている意味が理解できるのである。

この頃までにキーツがワーズワースからどれ程影響を受けたかについては，佐藤清著「キーツ研究」の第一章から明細な論文があるが，確かに「霊魂不滅の歌」第190行の "In years that bring the philosophic mind"[17]を上記ベイリーへの手紙の中にそっくり入れて，完全な心というものは半ば感覚に，そして半ば思想によるものであって，年令を重ねていくうちに，当然「哲学的な心」[18]になってゆくものだと加えている。彼が次に述懐しているようにこの地

上では空霊的な快楽である天の古い美酒を飲むばかりでなく，新しく知識を増して，総ゆるものを知ることが，永遠の幸福のために必要であると言うのである。美を追いながら，詩的霊感を讃えながらも，古来の宇宙的幻想による浪漫主義にひたり切れない面がうかがえる。それほど捕えたいと思う美は捕え難く去り易く，永遠の中にいる人生の果かなさを，キーツは誰よりもよく知っている。「美しいものは永遠の喜び」という信条を掲げながらも，美しいものは喜びであるのに違いはないが，更に美は永遠，for ever であるかどうかに，キーツの詩を探る鍵があるのではないか。

「憂鬱のオード」(Ode on Melancholy) の第三スタンザにある詩行は，キーツの特徴ともみられる精神を凝固させている。

She dwells with Beauty—Beauty that must die;
And Joy, whose hand is ever at his lips
Bidding adieu;

(憂鬱は美と住まう—死すべき美と共に，
また喜びは，常に手を唇に当てて
さよならを告げている。)

IV 想像力と空想力

前記岡本昌夫氏の著書第三篇「想像力説の受容と継承」に於て，キーツに感化を与えたであろうと思われるハントの想像力に関する個所を照合してみたい。「詩は，真，美及び力への熱情を述べるものであるが，その場合，想像力と空想力とによってその概念を具体化し，例示するものであり，空想力とは，想像力が軽く働く作用をいう。」[19]とある。「Fancy は Imagination の妹である」という例も出ている。つづいてハントは想像力は悲劇や真剣な詩に属し，空想力は喜劇に属するとも言っている。シェークスピアの「リヤ王」を読み耽った時のキーツは，彼の偉大な悲劇的荘厳美の奥深い領域へ，空想力を働かせてはいり，シェークスピアの虜となったことであろう。このことは1817年4月17日レイノルズ宛の手紙の中に含まれている「海に」というソネットをかいた動機などを考え合せてもよくわかる。キーツはハントよりもワーズワースに敬服していたことは前にも述べたが，英文学史上劃期的といわれる1798年の「抒情民謡集」序文にみられる想像力には学ぶところが多大であったと思われる。感受性が精妙であればある程，詩人の認識の範囲が広くなり，想像力と空想力とは修飾し，創造し，結合する能力となるという点，更に想像力が色々の心象を総合して一つのものとする力であるとする考え方は，コールリッヂの想像力説で言われているのであって，相互に差はかなりあるにしても，正に，浪漫派詩人達の共通の地盤を示すものであることを岡本氏は論じている。キーツは時に，想像力を曖昧にしている所があるが，哲学的思考を深めるよりは，詩人としての想像的能力を発揮して，彼が創造する世界を言葉にした。同時代の評論家W. ハヅリットも「詩は想像力の言語である」と言っている[20]。

「空想」(Fancy) は1818年12月の作であるが，空想を閉じ込めないで窓を開けて飛び立たせると，三色の酒を盛り合わせたカクテルを一気に飲み干したように，春夏秋冬の楽しみが湧いて来るという。鳥のさえずり，あらゆる可愛いい花，小動物などが次つぎと見えてくる。Oh, sweet Fancy! let her loose; \ Every thing is spoilt by use: / Where's the cheek that doth not fade, \ too much gaz'd at? Where's the maid \ Whose lip mature is ever new? (おお，かわいい空想よ，彼女を放しておやり。何んでも慣れ過ぎると駄目になる。眺めすぎてもばら色が褪せない頬があろうか。くれないの唇がいつもういういしい乙女はどこにいるのか。) と歌う。だから，翼を持つ空想に自分の心にかなう恋人を見つけさせるがよい，というのである。ワーズワースの言ったように，幼児や小供には大人の知らない空想力があるが，大人は慣れになり，感知力もうすれ，空想力も想像力も乏しくなってしまっている。恋人を見つける時の霊感に喩えて，すばらしいものが見つからないのは，牢に縛ばられ閉じこめられたものに自らがなるからであると歌って，遺憾なくキーツの空想の力とその方向を現わしている。

「サイキーに寄せるオード」(Ode to Psyche) は 1819年4月の作。ギリシア神話を題材にとったもので，香わしい美の殿堂が空想の世界に建てられる。今日となっては，もう威光の衰えた神々の中で羽ばたいているサイキーの燦く翼を詩人は霊感を受けた眼で見て歌うのだといっている。サイキーに向って自分をばあなたの聖歌隊に，あなたの声に，あなたの楽器にして下さいと懇願し，そうだ，私はあなたの祭司となって，私の心のまだ荒されていない所に御堂を建てようとする。其処では愉しい苦痛をもって新しく植えられた想像の森は，枝を張り伸び拡がりゆき，松林に代って風の中でささやくであろうと空想の世界を鮮やかにえがき出す。愛と美が一つに溶け合って，清純に歌われている詩である。この聖なる場所には，生きいきとした頭脳の花が絡んでいて，それは花を作ってもけっして同じものは作らない「空想」という園丁が創り出したものなのだという。この詩の最後には，夜の闇に窓が開かれている。心燃える愛の神キューピッドを迎え入れる為に，松明をあかあかと燃し，待ちわびて開け放たれている窓である。M. R. Ridley が「キーツの名技」(Keat's Craftsmanship) の193頁に述べているようにキーツには「サイキーに寄せるオード」辺りからゆっくりと気を安めて詩作する落ちつきと，豊かさが身についてきたように思われる[21]。

「美の祭司」と題しキーツの詩を研究した詩人日夏耿之介[22]は多分この詩の50行目の「あなたの司祭」を引いて，タイトルに用いたのであろう。日夏は詩集「転身」の頌序において，詩と霊感について「霊感は自由に遠慮なく潜行して謙虚な行いを果している」と書き，なお「天才は神と人との溝渠に横わる桟橋である。今代民主主義の理想は，この桟橋に向って火を放たんとする」と嘆いている。然し，現代人にとって日夏は余りに離れすぎて，言葉の上でも美意識が強く，民衆には馴じみにくかったのではなかろうか。野口米次郎にしても美の権威者であって，彼の芸術論は常に美の喜悦を根本理念とし，表面的なものは幻で，その中から鳳凰を飛ばさねばならぬと言っている。キーツがペガサスを空翔けさせるのと似ている。ローマンティシズムの波をいちはやく外国から受けた日本の詩人や芸術家が，想像力によって民衆にわかる

日本の詩や芸術を産み出すことはむずかしいことであった。今後も我々が新しい形で，研究し続けなければならない課題である。

V 勤勉な怠惰

1818年10月27日付 R・ウッドハウス宛の書簡を熟読するとキーツの芸術家，詩人としての円熟が近づいていることが窺われる。この年の夏にスコットランドを旅した際，「バーンズの墓を訪うて」と題したソネットを書いた。この詩については佐藤清氏も Murry も長い頁にわたって分析解明している。マリは "Studies in Keats" の第四章，"The Feel of *not* to Feel It" でこのソネットを取り上げ，その心理的な面白さはキーツが half-asleep，半ば睡眠状態で半ば眼ざめた状態であったとして，次の一見不可解な行を説明している。

All is cold Beatuy; pain is never done

（すべては冷たい美，苦痛は決して止まぬ）

6月と7月にケズウィックから 弟トムに宛てた手紙を参照しながら，詩人の心中を分析し，詩人はどうしても周囲の事物や風景に同化し得なかったばかりか，苦痛に等しいものを感じたということで，その時の自然の佇やダムフリーのバーンズの墓が，古典的でもなく，中世的でもなく，しっくり溶けこんでこなかったという解訳をしている。エイミー・ロウエルが言った「安らかな怠惰」と「不安な怠惰」とは大いな差があるという一節も引用されて興味深い。

1819年3月に弟ジョージに宛てた手紙には，極度に何んにも感じない怠惰な感じで，脳髄の組織が身体の他の部分と共に緩んでしまった放心状態で，非常に良い気持になってしまうことが書かれている。「詩」も「野心」も「恋」も私に何んの刺激も与えず，神経を刺すこともなく，行き過ぎてしまう，この怠惰こそ "diligent indolence"（勤勉な怠惰）というもので，新しいものが芽ばえてくる創造的怠惰であるとマリは指摘する。佐藤氏も「物を感じない感じから『暖かい気持のよい，勤勉な怠惰』という純粋な創造的状態へ最も近い前奏曲」としている。ここに自我自己の滅却ということも起るのである。光と影の交錯している状態ではなく，完全に自己は熔かされて無となるのである。シェークスピアは完全に自己を前に出さず万人の心をもって数々の戯曲を書いたのであるが，キーツがベイリー宛の書簡（1817年11月22日付）で，天才には個性が無いと言ったのは，シェークスピアと同じように自己の個性を失って，他の事物の中に生きることを指すのであろう。マリは上記の「キーツ研究」70頁で "Warm Beauty"，それは苦痛が去ってしまった最もよい詩的状況として挙げている。キーツが自己というものをよく知った上で，自己から分離された明澄な状態になった時に，この「勤勉な怠惰」が起り，この統合された気分から自然に生れるのが詩であるというのである。一度この詩境にはいることが出来た人は，この明澄な気分は長つづきするとは限らないけれど，それ以後は決してこの体験を忘れ得ぬものであることも，マリは述べている[23]。佐藤清氏は更にワーズワースの「霊魂不滅の歌」にふれ，消え去った幼児の幻の光を，自然の中にもう一度取り戻そうとする知覚は「我々から落ちて行き，消えゆく感じ」であって，キーツの放心状態と同種のもの

であるとしている。

以上は1819年という大切な年に到るキーツの詩作に関する心境について考察したのであるが，松浦暢氏も「キーツのソネット」（吾妻書房）に於て 1818年1月を境に，ソネットもペトラルカ詩型から，シェクスピア詩型に移ったことを挙げ，「変容以前のキーツは空想的，感覚的，楽天的であるのに反し，それ以後は，より現実的，主知的，思索的傾向を挙びるに至った」と区別し，ソネット研究にも明確な線を引いている。1818年1月23日キーツは弟たちへ宛てた手紙に「リア王」を再び読み深い感動を受けたことをかき，古いロマンスに別れを告げ，最大の詩人シェクスピアへ全心を向けて，彼の "bitter sweet" を味わってみたいと言っている。シェクスピアからキーツは「消極的受容」(Negative Capacity) を学んだのである。「リア王」にみられるあの強烈な人生の悲惨に体当りして，しかも冷静に突き放された形で人間を直視し得る深い洞察力を知ることは，「賢明な受容」(Wise Passiveness) を体得したとも言えよう。

当時，キーツ自身の生活は家庭的不幸に加えて，力作「エンディミオン」がエディンバラの「ブラックウッヅ・マガジン」や権威筋と信じられていた「クォータリー・レヴュー」から酷評をうけたことなど大変な衝撃であったことは前述の通りである。1818年2月19日作のソネット「つぐみが言ったこと」は彼の心中を表わして意味深い。

O fret not after knowledge—I have none,
And yet the Evening listens. He who saddens
At thought of idleness cannot be idle,
And he's awake who thinks himself asleep.

（おお，知識を求め焦るな，—私に知識は無い，
けれど夕べが耳傾けて聴いている。
怠けていると思うて悲しんでいる人は，怠惰であろう筈がない，
又，眠っていると思う人は目覚めているのだ。）

キーツには苦難を受けて立ち，悲境に会いながらも動ぜず，彼の信じるところを貫いて行った人間としての蕊の強さがある。怠惰も眠りも来るべき力の源となるのである。

III オード抜萃

豊饒の年，1819年を迎える前奏曲をみてきたが，この年の始めに，キーツは Fanny Brawn と知合って恋に落ちた。前年6月ベイリー宛の手紙でも分るように，兄弟や妹への愛は深かったが，女性に対する感情は抑圧されたものになっていた。一旦恋に傾くと狂おしい迄になる詩人の性質がファニー宛の手紙やソネットにあらわれている。然し，まだ若く派手好きの彼女との恋も思い通りには運ばず，焦りや疑い，苦しみが多かった[24]。加えてスコットランド地方の旅行中から咽喉の痛みを訴え，Tom と同じく宿命の肺患となる兆候もあらわれて不安も襲ってきた。しかし詩人の魂は不幸の中にあっても沈滞せず，うごめく人間苦悩の世界を通って，変化し，高揚していくのが，次のオードなどにあらわれている。現実の社会で八方塞りとなり，

打ちのめされるばかりになると，そこから更に真実へ向う心と美への渇仰が強烈となるのである。"Sorrow is Wisdom" と12月の手紙に書いているが，苦闘の中から，天才でなければできない仕事をした。こうした中の珠玉の詩篇は稀にみる潜在的な光彩を放つ。「レイミア」「イサベラ」「聖アグネス祭の前夜」「聖マルコ祭の前夜」等の優れた物語詩や「ハイペリオン」「ハイペリオンの没落」等の未完の長詩に及ぶことはこの稿ではできないが，オード三篇を選ぶこととした。

1) 夜鶯に寄せるオード (Ode to a Nightingale)

1819年5月初旬，ハムステッドのウエントワースプレイスに借りた家の庭で，短時間に書き上げたものとされている。キーツの特徴を遺憾なく発揮した名篇として，数多の批評家や鑑賞家が解訳や評論を試みている。若い頃に読んだ感動は，今尚同じく何回読んでも新たな詩の世界をもたらしてくれる。何度も始めから声を出して読みたくなる詩である。

My heart aches, and a drowsy numbness pains
My sense, as though of hemlock I had drunk,

(我心は痛み，眠りを誘う痺れが感覚を疼かせる，
あたかも毒人蔘を飲んでしまったように，)

又今しがた阿片を飲み干して，忘れ河の方へ沈んで行くようだと，冒頭から現実に耐え切れないで，憂欝そのものの半麻痺状態に落ち込んでゆく。心身ともに支える何ものも無い危険な有様で，苦痛を伴っているのにもかかわらず，反対の何か心地よいものに誘引されていくのは，キーツの魔術的手法ではなかろうか。我を忘れる時に詩的能力を一番発揮できることは前にも述べたが，キーツは夜鶯の幸福を羨やむのではなくて，余りにも鳥が至福の存在なので，この様な気分になるのだ，と次に歌うが，自己意識は強く，鳥の幸福と一体になるまでには，まだまだ空想力と詩魂を傾けなければならない。"too happy" であることは幸福そのものではない，何か幸福以外のものが予感される。当初から pain と happiness の対立がこの詩を引つ張っていく。「軽ろやかな翼をもつ樹々の精よ」と呼びかける夜鶯は咽喉を思い切りふくらませて，たのしく夏を歌う無心の鳥であって，人間とは別世界の幸福をもっている象徴である。

第二のスタンザでは，ああ，一杯の葡萄酒が欲しいものだ！と長く貯蔵された美酒を一思いに飲み干せば酒の力で鶯の仲間入りが出来ようかと願う。もう既にキーツの空想は太陽の輝く南仏プロヴァンス地方に飛んでいる。純正の葡萄酒がなみなみと満ちた杯の連想は如実であって美しい。

With beaded bubbles winking at the brim,
Anb purple-stained mouth ;

(ふちに珠なす泡がきらめき，
飲み口が深紅色に染った盃，)

bが一行に何回か連発し頭韻をふみ，〔i〕や〔i:〕音の続く聴覚の心良さは泡立ちきらめ

く酒を効果的に写している。第一スタンザをアンダンテで歌うとすれば，ここでは明らかにダンスも唄もあり，アンダンティーノからアニマートとなる。然し，それも人に知られないでこの世を去るためであり，小暗い森の彼方へ消えてしまいたいのである。憂愁の色は濃くなり，第三のスタンザはこのオードの中で最も苦痛に満ちている。夜鶯はこの世の倦怠や焦燥熱病などとは全く無縁のものであるが，それらを全て忘れるために，果てしもない彼方へ行きたいと詩人はねがう。そして現実の人間界にある病苦，悲哀，絶望を思い，又もくり返し「美」も「恋」も儚かなく移ろうものであることを歌う。

Where Beauty cannot keep her lustrous eyes,
Or new Love pine at them beyond to-morrow.

（美人の輝やく瞳も束の間で，
新しい恋も明日より後はわからない。）

第四スタンザは，酒の力ではなく，眼には見えぬ Poesy の翼にのって，すばらしい空想力で森の中から夢幻の世界へと翔る。シェクスピアの「真夏の夜の夢」の中でオベロンとタイタニアが大勢の妖精を従えて登場するような空想を逞しうするが，この地上の森は小暗く，天からそよ風が吹いてくるだけであると歌う。

第五スタンザは一番明るくて，キーツが描く森の中の自然美を描写したものの中で，優しさと香わしさを美しく歌った代表的な詩行といえよう。文字通り眼には見えないけれど，五官と統合意識で五月がもたらすあらゆる季節の喜びを感知することができる。草や叢，野生の果物，白さんざしや野ばら，束の間を咲く菫，露を含んだ麝香バラ，それといつもキーツが忘れない夏の夕べの小さい羽虫の唸りなど，イギリスの五月が生み出す最も美しいそして人間に密接な景物で，詩人が好んで歌う情景である。こうした若々しい自然への停滞がこのオードの中間になかったのならば，「夜鶯のオード」全体のバランスはとれなくなってしまったであろう。第五スタンザのゆとりが，来るべき発展との対照となって，巧妙である。

第六スタンザで詩人は easeful Death（安らかな死）を半ば恋してきて，彼の静かな息をば空（くう）に取り去ってくれと，幾度願ったことかと告白する。だが，今こそはこの真夜中に痛みもなく死ぬことが，最も満ち足りたことと思えると言う。次の瞬間には生から死への飛躍が具体化して来て，夜鶯が喜悦に溢れて歌っている間に，詩人は鳥の声を鎮魂歌と聞きながら，遂に自分は芝土と化してしまうのだと歌う。キーツの書簡から推して死を願うような個所がこの頃，6月10日ベイリー宛のものにみられるが，それは実生活の一部であり，この詩は彼が創り出した美しい意識の流れが，背景的なものの切実さと相まって，心よい死という終局を想像する。「詩」が「死」を恋している典型の作であろう。朗かに歌う鶯と，土と化した詩人との差は何んと大きいことだろう。

第七スタンザでは，夜鶯は不死鳥と呼ばれ，空想力が空間ばかりでなく，時間的にも遥かに超越する。この美しい鶯の声は昔，帝王の耳にも又，野夫にも聞えたことだろうし，望郷の思

いに涙して麦畑に立つルツの胸にも響いたことだろうと，旧約聖書ルツ記の中から，落穂拾いをする心優しい寡婦の姿まで，絵画的な効果を伴って登場させる[25]。キーツは遠いもの，異郷的なもの，夢幻的なものへの憧れから，どうしても離れられない。これは「眠りと詩」や「エンディミオン」にも充満していた。こうした空想は，官能を痺れさす妖艶な美となる時は更に現実離れしたものとなり，一種の魔力ともなる。「レイミア」や「無情な美女」の中にはこの妖しい美が全篇を貫く要素となる。アーノルドはこれをケルト詩歌の特色で咒法的なものとしている[26]。次の詩行にも限りないロマンティシズムがうかがわれる。

Charm'd magic casements, opening on the foam
Of perilous seas, in faery lands forlorn.

(波しぶきの上に開いた魔法の窓,
妖精の住む恐しい荒磯にさびしく。)

言葉のもつリズムや，Oの音の連続，fとlの頭韻が音楽的効果を奏していることにも気づく。この窓の背後には幽閉されているどのような苦悶の佳人を想像しょうと自由なのである。

forlorn！の響きをおうむ返しにそのまま第八スタンザの最初に持ってきて，その言葉の響きが鐘の音のように詩人を現実に呼び戻してしまった。詩人の空想も「さびしい！」という人の胸に泌みる声で覚めてしまった。「さびしや」とか「ああうらさびし」[27]の表現は島崎藤村などの詩歌によく出てくるが「さびしい」ということは人間共通の深い感情であろうか。とにかく，あれほどキーツが精魂を傾けて，高度の詩的幻想の真只中にあったのにもかかわらず，妖精の国の魅力もかき失せて，孤独の我身に還るより仕方がない。詩人は充分に思い知らされて，「空想」は音に聞くほどにはうまく人を欺くことが出来ない者よ，いつわりの妖精よ，と言わざるを得ない。実は現実離れしている妖精に欺かれるのは承知の上で，詩人はもっと永く身も心も幻や夢の国に滞っていたかったのである。夜鶯の歌は消えた。詩人は地上に喘ぐ元のままの自分でしかあり得ない。Murry はこの詩は死の勝利を歌うと共に絶望の詩でもあるといっている。この詩は読み終っても甘さとにがさが残って，意識の上でも覚めているのか半ば眠っているのか分らない。夜鶯は捕え難い理想の美なるものであり，長つづきしない幸福を求める永遠のテーマを鶯に寄せて歌い，万人の肺腑を突くのである。

2) ギリシア古甕のオード (Ode on a Grecian Urn)

夜鶯の詩は天高く翔る鳥と詩人自身を中心としていたので，理想の天から現実の地上へ還らざるをえない歌となった。ギリシア古甕は時代的にも遠い歴史的遺品で，大理石の固定した芸術品である。キーツはヘイドンに連れられて，エルギン伯がパルテノン神殿から大英博物館に持ち帰ったというギリシア彫刻をみて，魂の底から感動したことはソネット[28]で歌っている。この甕の浮彫は方々の彫刻や絵画のイメージを混ぜ合せたものとされている。同じ23才7カ月の作であっても，夜鶯のオードとは詩作境地が大層異っている。安定した静寂なものを通して，詩人の空想力は遠いギリシアの楽土や，アルカデアの谷へと思いを馳せる。先ずはじめに古甕

を「静寂の花嫁」と呼び，「沈黙と悠久の時の養ない児よ」とも言う。このつつましやかな花嫁，何千年何百年の時を経た壺は何を語るのか。ギリシアの牧歌的風景を描いたこの歴史家は何を書き残したのか。キーツは自分の詩よりも華やかに麗わしく昔を語ってくれる者よと古甕に言う。言葉の詩よりも沈黙の詩である絵画彫刻の方を，優れたものとしてギリシア古甕に呼びかけているのである。彫られた僧侶や群集や若者をみて "What wild ecstacy ?" と第一スタンザの終りで問う時は，既に人間的快楽と喜悦に思いを及ばせている。

第二スタンザはパラドックスと思れるような表現でありながら，真理を床かしく歌っている。

Heard melodies are sweet, but those unheard
  Are sweeter; therefore, ye soft pipes, play on ;
Not to the sensual ear, but, more endear'd,
  Pipe to the spirit ditties of no tone :

(聞える調は美しいが，聞えない音楽は
一層美しい。だから，優しい笛を吹きつづけよ，
感覚の耳に聞えるのではなく，もっと優しい耳に
音のない調べをば，心ある人に吹けよ。)

静寂の中に妙音を聞くことは，東洋的な象徴芸術の精神と通ずるものがある。歌道でも仏教精神から来たものか無常感を越えて，生死を離れた境にはいって歌われるものときいた。茶道でも静座するところに，無我の境地が生れ，自然界が開け，幽寂の声が聞えるのではないかと思われる。夜鶯では耳に聞える音楽を追って行って空想は上昇した。しかも此処では，静寂から時限の異る世界へ，時間の無い世界へはいっていく。若者は恋する乙女を追うが，手が届くばかりの所に来ても，決して捕えられないし口づけも出来ない。だがここでキーツは言う，嘆くことはない，というのは彼女の美しさは決して色褪せないし，若者が愛しつづけるならば乙女は永久に美しいのだと芸術の永遠性をもってくる。夜鶯のオードで美人の瞳も明日以後はもう輝きを失うといいながら，芸術化した美には，正に反対のことを歌う。詩的想像の方向は果てしもなく拡がるのに，大理石には安定した固着感を持ちつづける。この間キーツには変化があって，浪漫的な動きから，現実凝視の静けさに向いつつあるといえよう。夜鶯の歌も永遠に我々の耳に残るが，大理石の恋人の姿もキーツの詩によって新鮮なものとして残る。More happy love! more happy, happy love! \ For ever warm and still to be enjoy'd, \ For ever panting, and forever young : (もっと仕合せな恋！もっともっと幸福な恋！いつまでも温かく，これから未来に楽しみが待っている，喘ぎ求める永遠に若い恋。) 青春をこのような形で止めようとしたキーツの気持は，何時の時代の人の胸にも往来する時間停止の方法であろう。現実が脆ければ，悠久の時間の中に美を投げ入れて讃美せずにはおられない。ギリシア人が，時をクロノスとカイノスとに分けたと言うが，時間を超越した真理の時間，カイノスを森の歴史家，ギリシアの古甕は教えてくれたのである。ふり返って俗世の恋は，悲しみの極みや，飽満にみち，恋人の額は燃え，舌は灼けるばかりである，これは実際にキーツがファニーとの恋で焦燥と疑惑，苦

悶を次第に強く経験しつつあったので，真に不変なものを渇仰する心が切になるのは当然であった。

第四スタンザの描写は名画を繰りひろげるように生いきとしている。祭壇へ犠牲を捧げるために行列をしているらしい。絹のような脇腹に花飾りを締めてもらい空に向ってもう一と鳴いている牝牛の様子は実に艶やかである。更に浮彫には見えない彼らの住居を想像し，河辺か海岸か，又は平和な砦で守られた山の上の街かと静寂の風景を想像する。すべての芸術品は歴史や背景，その精神や余韻を持つものであって，キーツは完全にギリシア古甕の中にはいっている。これらの人々が出払った小さな町は永久にひっそりしているだろうし，様子を告げに帰る人もないだろうと思いをめぐらせる。

第五スタンザにはいると，アテネ風の高雅な形よ！と古甕の浮彫の草木や大理石の男女の姿を讃えるが，「冷やかな牧歌よ！」と遂に言わざるをえない。

Thou, silent form, dost tease us out of thought
As doth eternity : Cold Pastoral !

（静寂の形のあなたは，永遠とおなじように
我々を悩ませ思想の外に追いやる——冷たい牧歌よ！）

古甕の現わすものは「現在」の美である。永久不変な大理石の浮彫は，矢張り現在目の前に存在する事物なのである。「永遠の現在性」という言葉で上島建吉氏は「ロマン派詩選」に註解をしている。永遠というものを詩人に限らず人間はどんなに求めてきたか，永遠なものは美しいものであり，しかもそれこそ真理であって，何時の世にも存続するものである。必ずや来る老いが当代の人びとを死滅させても，又めぐり来る後の世人の中に古甕は遺ることだろう。そしてその時も悩やむ人間の友となりつづけることだろうと言い，最後に次の有名な言葉を語り伝えてこのオードを終る。

Beauty is truth, truth beauty, —that is all
Ye know on earth, and all ye need to know.

（美は真実であり，真実は美である，
—これこそあなたがこの世で知るすべて，知らねばならない一切だ。）

大胆な表現は後世の批評家や鑑賞家を驚かして，それこそ議論は際限がない。現在真に美しいとみられるものは，そのものの命が真実であると認められる時，その真実なる美は永遠に持続されるべき美である。それを知ることができるために人間は生きているのである。永遠の美なるものの語りかけに耳を傾けることの出来る人は，喜びを得るものである。

F. W. ベイストンはこのオードを評訳するに当って，キーツがコールリッヂから教えられたことを指摘している。それは，丁度一カ月許り前，コールリッヂとハムステッド・ヒースを散歩していた時「詩は反対性をもつもの，不調和をなす質のものと，均衡を取るか又は融和させる状態で現れてくる」[29]と言われたことを書いている。又批評家の友人ハズリットが，シェク

スピアに言及して，「シェクスピアの想像力は速度が速くて，同時に遠廻りもする。そして最極端を結び合せる」とも言っているのは注意に価する。キーツはいま美の儚かなさを強烈に美しい詩行で歌ってきた。実は詩人が求めて止まない美は，人間が生きている限り永遠に存在していくものである。その浪漫主義の象徴する美は現実を顕わす真理とつながり，潜在意識と意識，感覚と概念という風に相反するように見えるものと結び合うことになるのである。確かにキーツは，何百年後の世の友にも，普遍性をもった言葉を綴ってオードを遺してくれたのである。

3) 秋に寄せるオード (Ode to Autumn)

夜鶯のオードの美酒に酔った後に，絶望的な自己への再帰，憧れの孤独と現実との矛盾，頼みとした空想力の限界を経験し，次はもっと破綻のない確実な芸術の世界へと想像を走らせた。幾世代を経た歴史家として安定している古い壺を凝視した。一度死んだように見えても甦えるものへ転じる「ギリシア古甕のオード」を見てきた。一方で5月から9月までの間には「レイミア」を手がけている。この年の秀作「無情な美女」にも魔性の魅力に引き入れられる抵抗し難い傾倒が，鮮やかに息苦しいばかりにえがかれている。苦痛と焦燥の余りに強烈な悪魔的色彩への嗜好が生じることは，確かに人間性の常である。この死に至るほどの魅力に憑かれた中世風のバラッドは限りなく美しい。本心から言えばキーツは，もっとシェクスピアのように圧倒的な強さをもつ直感力を自分のものとした詩人になりたかった。焦ることを止め，完全に自己を脱却し，自然界も対照物も静かに凝視しょうとした。「木の葉が自ずと芽ばえるように生れるのでなければ，詩は生れない方がよい。」[30]とまで言った境地が最も望ましかった。それは不愉快なものが全部蒸発してしまった後の本物の姿で現われることであった。美と真が密接に一つとなる為には，そうした浄化がごく自然に成されねばならなかった。「レイミア」を書き終えて丁度2週間後，明澄な静寂がキーツを訪れた。「秋によせるオード」は彼の作中最も美しく又完璧とであると評するのは，W. J. Bate や H. Bloom のみではなく多くの人が同様の意見をもっている。9月21日付ヂョーヂ夫妻宛の手紙と，2日後のレイノルヅ宛のものにも，このオードを書くに到った心境が伝えられている。純粋に英国らしい川辺や牧場などの散歩道を見出し，何んとすがすがしい美しい季節だろうと言い，空気は少しひやりとするけれど，今ほど夕映の切株畑を暖かいと思ったことがないと書いている。このあたたかい，満ち足りた気分で「秋によせるオード」が作られたことに注目しなければならない。前記のオードは10行づつのスタンザであったが，この詩では11行づつとなっている。ベイツは時間的にたゆとう効果が出ているのだと言っている。そして "There is no'I'." とも断言して自我が没却されているとみている。又散漫な言葉もなく，キーツがかねがね願っていた理想と現実がうまく手を握り合ってここに "Greeting of the Spirit" があるといっている[31]。この詩には停滞の時間が長く，満ち足りた気分が続く。作物を成熟させる太陽をば，秋の親友として呼びかける処に，詩人の心は既に開き信頼して秋そのものと一体になる。太陽はよく心得たもので，葡萄の房も豊かに，りんごの枝もたわわに実らせ，総べての果実を芯まで熟させているのである。

"fill all fruit with ripeness to the core;" は科学的表現といえるまでに充実感を直截に示す。瓢箪は膨らみ，榛の皮は甘い仁で大きくなり，どの行にも，どの言葉にも満ち足りた意味が含まれて，天地の恵みに祝福されている。風景画的端正な明るさと静けさとが全体を包む。秋の陽差しの中ではまだまだ花は開くので，蜜蜂は喜び集って来て，何時までもこの暖かい日は続くのかと思われる時間である。夏中かかって貯えられた蜜は蜜房にねっとりと満ちあふれている。brim という言葉を好んで用いたキーツは，"at the brim" や "brimful" からここでは "o'er-brimm'd" となってしまった。Conspiring という語にも悪意ある裏の意味は思わないし，late flower にも次に来る冬枯れのさまも想像し難い。生命の限り咲き出す精一ぱいの花の精の解放を思うだけで充分足りている。この二字に凋落と衰滅の下地を出そうとする鑑賞を取らない方がよいと思う。

第二スタンザにみられる秋の擬人化は永久に新鮮味をもっている。秋の姿を農婦か誰かの形象にして場を描く。絵画美とも言えるような収穫期の静止状態を具現したのである。秋を探そうと試みる人にだけ見つかる秋の姿であろう。穀物倉の床にのんびり座っていたり，半ば刈り取った畝にぐっすりと眠り込んでいたり，又は落穂拾いの女のように頭上に籠をのせたまま小川の向うにいたりする。四番目は林檎搾り器から落ちてくる最後の雫をば，いつまでも忍耐強く見守っている長い緊張の姿である。華やかな装飾はなく，まだ刈られない麦に絡まる芥子の匂いがあるばかりである。それらの人物は，すべて受動的で長い野仕事のあとの休息の姿でもある。最後の滴りを秋の終りを意味するものと解訳する人もあるが，収穫の果汁を貯蔵するために余すところなく受ける細心の現れとしたい。

最後のスタンザはやさしく澄んだ秋の音楽で満ちている。春の唄はどこへ行ったのだろうかと振り返りはするが，淋しさを感じさせる間を置かないで，春もよかったけれども，もう過ぎたことは忘れよう，秋には秋の歌やよろこびがあるではないか，と淡々とつづく。キーツは先の手紙に於て刈株の野が，温かみを帯びて静かに暮れてゆく夕映の美しさを述べているが，この心境こそ今迄と違った円熟を示すものではなかろうか。正に "Warm Beauty" なのである。ばら色がかった棚引く雲も穏やかに暮れてゆく空にかかっている。楊柳の間では小さな蚋の群が，わずかの川風に吹かれて昇りつ下りつして，小さな悲し気な声を出す聖歌隊となる。丘の辺からは春生れの仔羊がもうすっかり大きくなって，元気のいい声で鳴く。夏から秋への楽人，間垣のこおろぎも歌っている。秋冬を通して歌う胸紅駒鳥は柔かい最高音を出して果樹園の方で歌っている。渡り鳥の燕はまだ群をなして，この地を去ろうともせず，明るい夕空をしきりに囀ずり飛び交う。春夏秋冬の歌い手がその場その場で思い思いに生命の声を合わせて，大自然の交響楽を奏でているのではないか。上島建吉氏は「ロマン派詩選」の鑑賞への手引き[32]に於て，「この詩は秋の豊かさを歌ったものと，単純に考えるのは早計である。……屠所に引かれる日も間近い小羊の啼き声であり，間もなく死に絶えるはずのコオロギの歌である。要するに『秋』は，ありとあらゆる術策を弄して，自然と人間に束の間の生の歓びを味わせようと努めるのだ」とあるけれども，人生の命は短く，喜びも果かないことは充分に生涯をかけて歌って来

たキーツであることは今迄見てきた通りであるが，ここに及んで再びあらゆる策を弄してまで秋の悲哀を隠そうと懸命の努力を払っている手法であるとは見ない方が，キーツの精神から言ってこのオードが生きてくると思う。「きりぎりすとこおろぎ」のソネットにおいても「大地の詩は決して絶えることがない」と繰り返し歌ったのであった。秋の次に冬が来る予測は誰にでもできることであるが，キーツはここでは明澄な思考停止を行って，「秋」と共にできるだけ長く滞ることが，最高に美とするところであったのだろう。小川和夫氏は英語青年1971年11月号で「詩人の意図はその時期的なずれをきわだたせるよりも，むしろ目だたぬように隠すこと，豊穣と衰滅とを一つのものの表裏として示すことであろう。」としているのは考えさせられる。鶯のオードのような生なましい現実への帰還はないのである。ギリシア古甕の美を讃える余りに詩人の想像力の不足を思うこともこの詩にはない。言ってみれば，「美は真実であり，真実は美である」の結びの言葉も，キーツの信念を述べざるを得なくなったような終曲となってしまった感があった。この「秋」のオードでは，総べてのことをわきまえ知ったキーツが，悲しみの音を消して，それ丈に美しさと喜びを強く連続的に歌ったものと思う。H. ブルームは「こんな短い詩を読み終えた丈なのに，悲劇とか，叙事詩の終りを読んだような気持になる」と言っている。1970年に出版された C. I. Patterson, JR, は彼の父に献げた "The Daemonic in the Poetry of John Keats" の最後の章で，「秋に」に於てキーツは今まで魅いられていた異教的妖魔的なものの美から全く離れ去り，急激に正反対に展開してきたと述べ，これこそキーツの anti-daemonic の勝利であるという見方をしている。この daenon はキリスト教以前のギリシア思想からくる美の世界に住む，善でも悪でもない daemon を念頭に置いたとしているが，キーツのこの詩は非常にイギリス的で，典型的な田園の秋に浸り切っている。確かに自我や対立も矛盾や否定も現われてこない。感覚的知力は豊富となり，秋の精髄を歌う把握力と集中力は，その詩のリズム感と相俟って美事である。今までにキーツの詩の中で，部分的に強烈な内在力を持つ美的表現を取り上げてきたが，この「秋」のオードでは，第一聯の豊かな自然描写，第二聯の静かな擬人化，第三聯の溢れ出る秋の清澄な音楽，それらが調和して三幅対となって，高度にダイナミックな，安定した時間の継続をもつ詩となった。W. J. ベイツが「否定的受容」の中で問題にしている「力」とか「生命力」とかは，シェクスピアの劇のように登場人物はないけれど，狭霧と大地の収穫の中で，どっかと腰を据えて存続しているのである。

VII 後期のソネットと書簡から

1820年2月にジェイムス・ライスに送った手紙に，キーツが人間として苦しむ限りの苦悩を経験し，病をいたわりながら自己を凝視している言葉がある。「私の非常に短い人生から判断するのだが，病気になったお蔭で，私の心は欺瞞的な思想や形象の重荷が取り除かれて，物事をもっと真実な光に照して捕えることができるようになった。何んと驚いたことには，我ながら驚くのだが，この世を去るという時期が迫ってくることを思うと，自然の美しさが人に与えて

くれる感動はどんなに強いことか！」[33]と言って，幼年時代から好きであった野の花にこの上なく愛情をよせている。又同じく2月恋人のファニー・ブローンへ病床から書いている，「私の病気は二人の間に何んと大きな障害となってしまったことだろう……もう一つどうしても残念なことは若し私がこのまま死ぬようなことがあったら，友人達が僕のことを思い出して，誇りと思ってくれるようなものは，何一つ残さないことになる。然し，私はあらゆる事物の中に存する美の心は愛しつづけて来た。もっと年月があれば，私も人に記憶してもらえる仕事ができたであろうになあ――」[34]と，切実な思いを残している。もう一カ月後にも同様なことをファニーに書き送っている。キーツは自分の弱点を謙虚に知るだけの聡明さがあった。キーツはHazlitt の著書「シェクスピア演劇の性格」を買って，特に「リア王」の章を明細に読んだこと，又ハズリットの土曜講義を欠かさず聴き，特に「シェクスピアとミルトン」を感動をもってきいたことが記されている[35]。1818年10月27日にウッドハウス宛に書いた手紙は，キーツの真実に迫る傾向を示す重要なものとして，マリやベイツをはじめ諸大家が取り上げるものであるが，キーツを研究する上で眼界が拡がってくる。その一部を訳すと，「詩的な性格というものに就いては，私も何かそうしたものに携わる者の一人だが，ワーズワース一派や利己的威厳をもった人達とは別個なものである。それはそれ自身ではなく，総てであり，又無でもある。性格というものも無く，光と影を楽しみ，芸術的風雅を味うのであって，邪でも正でもなく，高低もなく，貧富の差もなく，下俗でも高級でもない。イヤーゴでもイモージンでも同様に受入れることに大いな喜びがあるというものだ。哲学者諸賢にショックを与えるものが，カメレオンの心を持った詩人を喜ばすのだ。」と言う意味である。キーツは人間の崇高性とその反面の動物性を合せもつことを受け入れて，現実を通してきびしい眼を向けようとする。故に詩人は最も非詩人的存在であり，同一性なく，他のものの体内にはいってしまうものであると言っている。ハズリットが，他者の感情の中に自分自身を放出して，まだ存在しないものを予測するとして，それ故に，「他者を愛することが出来なければ，自分自身をも愛することが出来ないのだ」[36]と言ったことは，キーツに大きく影響していると思われる。又1819年3月19日付弟夫妻に宛てた手紙の中で，動物的であり，本能的であっても，目的に輝やく瞳は美しいし，その態度も立派だと言う。街頭での喧嘩は憎むべきものだが，その中にみられるエネルギーは美しい，最も平凡な人間でも優雅を示すことがある。それは他でもない詩がそこに存在する所以だと言っている。「ロメオとジュリエット」の中で，敵同志が街頭で演じる幾つかの果し合い，近くは「ウエストサイド物語」の中の強烈な場面に，キーツが言おうとしていることが仄めくのを覚える。

「ハイペリオン」は断片であるが第130行に "Die into life" とあるように，又塚野氏が「キーツ研究」で指摘されている通りに「ハイペリオンの没落」は "die and live again"[37] であるとすれば，生の最大の受容である死をば，其後どのように歌ったことであろうか。もっとキーツが生きながらえて，焦ることなく，天来の詩的才能を活かして，「秋によせるオード」のような詩を更に書いてほしかった。ともあれ，彼には永遠に朽ちない魅力がある。病を養う為

にイタリーへと旅立つ船上で，イギリスを去るに際し，ドーセットシャー沖に碇泊した時に，最後のソネットといわれる「煌く星よ」を書いた。この詩はキーツの自筆でシェクスピア詩集の「恋するものの嘆き」の前頁の空白に書かれている[38]。北極星のように永遠にまたたく不動の星でありたいと歌い，詩人の本懐を吐露した感動の詩である。 sestet に見られる美しい恋人の胸により添って，安らかな息使いを感じながら永久に生きたいというのは，万人が人間として共感できる最高の美ではないか。不動の星と永遠の恋人をこのように歌って，キーツは母国を去ることとなった。再び恋人に会うこともない運命を充分に知りながら……。1820年2月23日ローマに於て友人セバーンに看とられ，彼の手の中で息を引きとった。ローマの郊外にある静かな墓地に今もセバーンの墓と並んで眠っている。

最後にキーツにとって，潜在力と想像の国である未来を蔵した「海」のソネットを聞こう。

Oh ye! who have your eye-balls vexed and tired,
Feast them upon the wideness of the Sea;
Oh ye! whose ears are dinn'd with uproar rude,
Or fed too much with cloying melody, —
Sit ye near some old cavern's mouth, and brood
Until ye start, as if the sea-nymphs quired!

（おお眼球が疲れ切った人びとよ，
広びろとした海原を楽しみなさい。
おお，喧しい狂音で耳もつんざくばかりで
あきあきした音楽に倦みはてた人びとよ，
どこか古い洞穴の入口に座って，思いに耽りなさい，
妖精の合唱が聞えてきて，胸がときめくまで。）

「テンペスト」の中で妖精エアリアルが歌う[39]ような澄み切った美しさが流れている。

"Sea-nymphs hourly ring his knell:
Burthen. Ding-dong."

あとがき

「たしかに，此の世には何か真実なものがある」と信じ，英敏な美的感覚を働かせたキーツに共鳴感を得たのは，何年も前からのことである。彼のソネットやオードは，時や場所を違えても，幾度読み返しても飽きない魅力を与えてくれた。此度は楽しみばかりでなく彼の心を心として，本気でキーツの詩の中にはいりたかった。原書はもとより，多くの参考書や註解書，文学関係書を読まねばならず，時には一，二枚を書く為に数冊を読んで一日を過すことがあり，ここに扱わなかった詩にも少しは目を通す為に夜明けまでかかったこともあった。しかし，よみかえしてみると，何の変哲もないものである。絶えず着実に勉強していなければならぬこと

を反省させられた。諸先生，先輩，同好の友のご叱正を待つ次第である。キーツの言葉を借りて潜越ではあるが，「総ゆる事物の中に存する美の心」を愛しつづけて行きたいと思っている。詩の訳は，大意を日本語で表現しようと試みた拙訳であることを附記しておく。

註

1) Hyder E. Rollins: The Letters of John Keats 1814-21, Vol. I, Cambridge Univ. Press, 1958, p. 238.
2) W. Wordsworth の「ティンタン寺院上流数哩の地で詠んだ詩」39行にある "the burden of the mystery".
3) *Ibid.*, 140〜147行参照
4) 前述 Rollins 編キーツ書簡集 Vol. I, p. 173.
5) 1818年10月14日〜31日　弟ジョージ夫妻宛の手紙。"Then I should be most enviable—with the yearning Passion I have for the beautiful, connected and made one with the ambition of my intellect."
6) "After all there is certainly something real in the world." 1818年5月3日　レイノルズへの手紙
7) Robert Gittings: John Keats, Heinemann, 1968, p. 81.
8) Lafcadio Hearn: On Poets, 北星堂1971, 632頁参照，小泉八雲はキーツほどの詩人が小さな誤りをしても，それを訂正する方が詩の価値を減じるもので重大事でないといっている。又 Tennyson が Palgrave にこの点を注意したと安藤七之介編註「英詩とその鑑賞」110頁に註がある。
9) R. H. Fogle: The Imagery of Keats and Shelley, Univ. of North Carolina Press, p. 159.
10) 岩波文庫 (1-4) 新訓万葉集上巻佐々木信綱編（昭和2年版）405頁及び413頁
11) 野口米次郎著「日本美術読本」平凡社昭和3年版68頁
12) Longfellow は彼の "A Psalm of Life" に旧約聖書詩篇からダビデの詩 "Life is but an empty dream!" を引用している。
13) Patricia Merivale 著 "Pan the Goat-God", Harvard Univ. Press, p. 59 にはキーツが描いた「孤独な牧羊神」の意味が出ている。
14) "Sleep and Poetry" 186-187行 "They sway'd about upon a rocking horse, / And thought it Pegasus."
15) Rollins 編書簡集 Vol. I, p. 184. "I am certain of nothing but of the holiness of the Heart's affections and the truth of Imagination—What the imagination seizes as Beauty must be truth—whether it existed before or not."
16) 岡本昌夫著「想像力説の研究」南雲堂，1967，第二篇，「想像力説の確立者コールリッジの思想と学説」の97頁。
17) Wordsworth の Ode : Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood 第10スタンザ最終行。
18) "It is necessary that years should bring *the philosophic mind.*" Rollins 編書簡集 Vol. I, p. 186 参照。
19) 上述岡本昌夫氏著書138頁参照。
20) *Ibid.*, p. 135.
21) Rollins 編書簡集 Vol. II, p. 106.
22) 1971年夏長逝した。
23) John Middleton Murry: Studies in Keats, Haskell House, 1966, pp. 69〜70.
24) Fanny Brawn とは1819年春婚約したが，ファニーに宛てたキーツの恋文は非常に一途なもので，

"My love is selfish—I cannot breathe without you." という言葉も10月頃の手紙に見られる程，彼の恋はきびしく余裕のないものであった。

25) 旧約聖書，ルツ記第二章三節「ルツは行って，刈る人たちのあとに従い，畑で落ち穂を拾ったが…」とあり，その後にも彼女が朝早くから休まず働く記事はあるが，「涙する」情景はキーツが空想的に描いたものである。

26) 尾島庄太郎著「イギリス文学と詩的想像」北星堂，18〜20頁において，氏はアーノルドの言うケルト詩歌の特色をあげ，「英文学のケルト的想像」の中で，キーツの "faery land" に言及している。

27) 島崎藤村の「秋風の歌」第十一聯参照。

28) 1817年3月作のソネット "On Seeing the Elgin Marbles for the First Time".

29) J. Stillinger 編，Twentieth Century Interpretations of Keats's Odes の中で107頁F. W. Bateson の "Ode on a Grecian Urn" の項参照。

30) 1818年2月27日付 John Taylor 宛の書簡。

31) W. Jackson Bate 編 Keats (A Collection of Critical Essays) pp. 157〜160 参照。

32) 研究社小英文叢書「ロマン派詩選」上島建吉氏解説註解137頁について。

33) Rollins 編キーツ書簡集 Vol. II, p. 260.

34) *Ibid.*, p. 263.

35) W. Jackson Bate 編 Keats (A Collection of Critical Essays), Prentice-Hall, Inc., 1964, pp. 65〜67.

36) *Ibid.*, p. 64.

37) 塚野耕著，「キーツ研究」文化評論出版1970, p. 11, p. 57, p. 119 その他参照。

38) Robert Gittings 著 John Keats, Heinemann, 1968, Illustrations 45番参照。

39) Shakespeare の最も円熟した作 "Tempest" (I. ii. 396-403) 妖精エアリアルの歌。

原詩は H. W. Garrod 編 "The Poetical Works of John Keats" Oxford Univ. Press, 1958 版によった。尚，H. Buxton Forman 編 の "The Complete Works of John Keats" In Five Vols. AMS PRESS, Inc. 1970版も参考とした。